

メッセージ

ティルマン・ラフです。英国のヨークで開催された第22回世界大会で、光栄にも IPPNW の共同会長に再選されました。ここに反核医師の会の創立 30 周年を祝い、深い敬意とともにメッセージを送ります。

私は過去十年余にわたって反核医師の会のご招待により、日本での多くの会議に参加し、日本の同胞の方々とお会いし、意見交換する機会に恵まれました。そのおり私は、反核医師の会が、核による暴力と無差別の放射能汚染のない、健康で自由で安全な未来を求めて、常に力強く、真摯に活動していらっしゃることに、深い感銘を受けました。

私たちは今、歴史上重大な危機に直面しています。核の危険が日々大きくなる中、世界の様々な場所で、政治的軋轢が高まり、核兵器の使用さえ危惧されます。朝鮮半島、南シナ海、インド・パキスタンを抱える南アジア、中東、ヨーロッパにおける NATO 諸国とロシアの対立など、一触即発の危機は世界中に存在するのです。

また、核兵器の使用可能性や、使用の威嚇を明白に表明するなど、少なくない指導者が極端に挑発的なレトリックを用いる一方で、核保有国は、持てる核兵器の永久保有とハイテク化に余念がありません。核の危険が高まる中、私たちの活動はかつてないほど重要になっています。

一方で、先ごろ歴史上極めて重要な大きな進展がありました。国際法として包括的に核兵器を禁止する条約を、私たちは初めて手に入れたのです。核兵器は、人道的見地から決して受け入れられないことを成文化した、この条約が発効すれば、核兵器の保有、開発、使用、配備、威嚇としての使用、そしてこれらの活動への支援はすべて、この国際法の禁じるどころとなります。

この核兵器禁止条約こそが、世界の健康と民主主義という、人類共通の理想に対する新たな、強力な主張となります。この条約は、国連総会において、多くの加盟国の賛成により採択されましたが、その交渉において、無条件の核廃絶を求めて大きな役割をはたしたのが世界の市民社会でした。条約の発効後も、核兵器の速やかな廃絶に向けて、市民社会はその役割を果たし続けるでしょう。

皆さん方の日本における運動は、被爆者と核実験被害者の声を届けるという、

重要な役割を果たしてこられました。核の生き証人である彼らの語るストーリーは、頭ではなく心でこの問題に向き合うよう、力強く人々に語りかけます。核は、抽象化された地政学の巨大なチェス盤上の小さな駒ではなく、無差別に人々を傷つける歴史上最悪の破壊者であることを訴えます。この世界に核の居場所はありません。

皆さん方の運動に動かされ、日本政府は少なくとも条約の初期の交渉には参加をし、しかし反対を表明しました。核によって守られていると主張する国は多くあります。しかし、市民にたいして核兵器が使用された最初の国である日本が、歴史の間違った側に与している事実は、悲しく、受け入れがたく、この異常事態を私たちは解決しなければなりません。私たちはなんとしても日本を正しい側に導かなければなりません。核兵器の保有ではなく、廃絶によってこそ安全保障は達成されます。すべての国が、保有国、非保有国、核の脅威の有無にかかわらず、その責任を果たしていかなければいけません。

その意味でも、被爆者の声を政府に届け、政府に圧力をかけるうえで、日本の運動が果たす役割は重要であると思います。すべての国が条約に署名するように、そして最悪の兵器である核兵器の禁止と廃絶という、歴史の正しい側に与するように、働きかけなければなりません。

一方で、福島第一原発の悲惨な事故にみられるような、無差別広域の放射能汚染も大きな課題です。反核医師の会は、住民への健康被害を論ずるうえで、事故後大きな役目を果たされました。皆さん方は、公衆衛生の観点から何が必要なのかを特定し、その解決にあたられました。しかし日本政府が、被害住民の救済を最重要と位置づけ、第一線で住民を守ることはありませんでした。国際社会は今後もこの問題に関心を寄せ続けなければなりません。私たちが強く期待するのは、皆さん方が今後もリーダーシップを発揮し、公衆衛生の視点から、放射能汚染に対して何がなされなければならないかに向き合い、また私たちきちんと情報を届けてくださることです。

最後に、30周年を迎える反核医師の会のさらなるご活躍を祈念します。核兵器廃絶という最も緊急の使命達成に向けて、また、無差別の放射能による暴力という脅威をこの地球上からなくすために、皆さん方と今まで以上に連帯することを希望します。

ご活躍をお祈りして。
アルフレッド ティルマンラフ